

「内なる人を強めて下さい」

エペソ人への手紙 3 : 14 - 19

February.12.2023

エペソ人への手紙 3 : 14 - 19 (パウロ)

Preface

先週の礼拝では、「なぜ使徒パウロが、1章に続き、同じような内容の祈りを再度祈ったのか？」という理由について考えていきました。

その理由を一言で言いますと、「パウロが祈ったような内容が、私たちの内にはまだない、ないのかもしれない」ということでした。

皆さんは先週1週間、エペソ書3章のパウロの祈りのような祈りを祈ってみましたでしょうか？

祈ったとしたら、そこで何をお感じになったでしょうか？

祈りの内に、どういうことを示されたでしょうか？

私は、先週の礼拝が終わって、この使徒パウロの祈りを考えながら、「パウロ先生の祈りのような祈りを祈ろう」と思って祈ろうとするのですが、怖くてその言葉が中々口を突いて出て来ないということを経験しました。

以前の私ならば、喜んで、「主よ、どうか私の内なる人を強めて下さい。私の心の内にキリストを住まわせてください。愛に根差し、愛に基礎を置きながら、人知をはるかに超えたキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるのかを知ることが出来ますように。そして、神の満ちあふれる豊かさにまで、私を満たしてくださいますように」と、喜び勇んで祈ったと思います。

ところが、その祈りの内容をよくよく考えてみますと、「私は、私自身を捨てます」という宣言、告白が込められている祈りだということに気付いてしまいました。

キリスト教信仰の真髄であるイエス様のお言葉、「誰でもわたしについて来たいと思う者は、自分を捨て、自分を否定し、自分の十字架を負い、わたしに従ってきなさい」というあのお言葉と重なってしまいました。

先週の夜のオープン礼拝でも、賛美を歌う時、その賛美の歌詞が怖くて、「こんな歌詞を喜んで口にしながら賛美を献げることがどれだけ大胆で、どれだけ恐れ知らずな行為なんだろう」という思いが心の内にふと湧いてきてしまいました。

例えば、先週のオープン礼拝で歌った賛美の歌詞の中に、「キリストの心が我が内に造られる」とか、「あなたの前に遜ります」とか、「我が思い、我が心をあなたの前に差し出しますから、私を造りかえて下さい」というような歌詞があった

のですが、以前ならば、「全くその通り！そうしていただきたい！そうして頂くことが私の願いですし、本望です」と、喜び勇んで賛美していたのに、この日ばかりは、なぜか使徒パウロ先生の祈りの内容と重なりながら、また先程のイエス様の言葉が思い出されながら、「ああ、僕は、僕自身を捨てることが出来てない。この賛美を口にし、この祈りを口にするには、『神様、もう金輪際私は、私自身のために生きることはなく、私は私自身を諦めます。私は、私自身を捨てます。私は私のものである以前に、あなたの所有であり、あなたの器でありますから、キリストの愛を前にして、私が主張をしたり、私の意見を述べたりするようなことは一切ございませんので、あなたの好きなようにして下さい』ということなんだ」と、賛美や祈りから来る喜びよりも、賛美と祈りに込められた自分に死に、自分を否定するということの難しさ、怖さが感じられて仕方ありませんでした。

それでも、この使徒パウロの祈りが真実であり、賛美の歌詞が真実であり、人間にとって真実な喜びであり、見せかけではない本物だということには変わらず、納得出来ました。

使徒パウロの祈りこそ本当の祈りであり、神様が待っておられる祈りであり、キリストの身丈にまで成長することを望む者たちの祈りであり、キリストの身丈にまで成長させて頂くことを望んでいるならば、必ずや祈らなければならぬ祈りであるということには変わりありませんでした。

そして神の前に降伏し、この祈りが心底口を突いて出てくる時には、比類なき平安平和があることも分かりました。

だから、なお一層祈りたいと思いました。

難しくても、怖くても祈りたいと思いました。

「私の内なる人を強めてください」と。

「私の内に、キリストを住まわせてください」と。

「人知をはるかに超えたキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さを真に知ることが出来るようにしてください。私は無くなり、私は無くなり、神の豊かさが私を満たしてくださいますように」と祈りたいと思いました。

祈るんです。

なぜなら、そこにこそ、私たち一人一人の存在が真に現れ、真に生きているという実感が伴い、神様が私たちの存在を真に現して下さり、真に生かして下さるからです。

Part One

今朝もこの使徒パウロの祈りを、引き続き考えていきたいと思っております。特に16節の御言葉、「内なる人を強めて下さい」という祈りについて考えていきたいと思っております。

もう一度エペソ3：16を見てみましょう。

エペソ人への手紙3：16（パウロ）

「力をもってあなたがたを強めてくださいますように」という言葉は、「私たちが私たちの望むままに人生を生き、私たちの願う通りに人生生きられるように神様が強めてくださいますように。私の願い事が叶うような人生を生きられるように神様がしてくださいますように」というような意味ではありません。

エペソ 3 : 16 の箇所を新改訳聖書第二版・第三版ではこのように訳しています。

エペソ書 3 : 16 第二版、第三版 (パウロ)

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。

「あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように」、つまり、「内なる人に働く聖霊なる神様が、あなたがたの内なる人を強めてくださいますように」というのが、エペソ 3 : 16 が意味していることです。

私たちが強められるのは、内なる人です。

外なる人ではありません。

そもそも主イエス様は、内なる人のためにこの世界に来られました。

内なる人の存在を知らないかのように、または、本能的に何となく微かに感じはするものの、その存在について確かなことが分からず、外なる人ばかりに神経を使いながら回っている、回されているこの世界に、内なる人の存在とその確かさをお示しになるために、イエス様はこの世界に来られました。

この世の問題の根本的な原因は、内なる人がいないこと、外なる人しかいないことだと、聖書は始めから最後まで語り続けています。

外なる人とは、肉の欲、生活・暮らし向き・人生の自慢、所有・獲得による誇り、プライド等の人間の作り出した見てくれのことです。

「内なる人」という表現は、使徒パウロ独特のもので、新約聖書ではパウロしか用いていません。

ペテロは、パウロの言う「内なる人」を「心の中の隠れた人」とか、「柔和で穏やかな霊」と表現します。

使徒ヨハネは、単純に「たましい」という言葉で表現したりもしています。

ペテロの言葉を見てみましょう。

ペテロの手紙第一 3 : 3-4 (パウロ)

「心の中の隠れた人」、「柔和で穏やかな霊」。

ここで言う「柔和」というものの意味するところは、人の力で装うことの出来る柔らかさや優しく見える人格っぽいものや品性っぽいものではなく、「神の前に降伏し、神に全的に依り頼み、私たちの内に内在される御霊なる神様のご臨在

のもと、神との関係が深められた結果、実らせて頂いたもの」という霊的な内なる実り、心の中の隠れた人の成熟を意味する言葉です。

外なる人を満たすことにすべてのエネルギーを集中させ、すべての努力と関心を外なる人に専心しながら、問題が解決しないと嘆いているのが世であり、その世での人間模様です。

内なる人の存在を見失い、あらゆる問題の根本的解決の道を失っているのがこの世界です。

そのことをはっきりと示し、すべての問題の根本的解決のパラダイムを「内なる人」から求めることを教え、また「内なる人」から求めなければならないことをはっきりとお示しになるために、イエス様はこの地に来られました。

そしてそのために、ご自身の身をお犠げになりました。

Part Two

公生涯を始めなされたイエス様に現れたサタンは、この世界のすべてとその栄華をイエス様に見せた後、「もしひれ伏して私を拝むなら、これをすべてあなたにあげよう」と、外なることを用いてイエス様を誘惑しました。

するとイエス様は、「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある」と仰りながら、「内なる人が神と繋がることこそが本質的なことなんだ」と、サタンを蹴散らしました。

そして、イエス様は後に、「たとい人が全世界を手に入れても、『まことのいのち』を損じたら、何の得がありましょう。そのいのちを買い戻すのに、人はいったい何を差し出せばよいでしょう」と、「内なる人」を「まことのいのち」という言葉に言い換えながら、人にとって大事なものは、キリストにあって成熟させて頂く「内なる人」だと仰いました。

また、こんなことも仰いました。 私たちよく知っている言葉です。

マタイの福音書 6 : 30 - 33 (パワポ)

「信仰の薄い人たちよ、まず神の国と神の義を求めなさい。」

外なる人に執着してしまう私たちに、イエス様が語り掛けて下さっている言葉です。

目には見えるけれども不確かなこの世界に希望を馳せ、この世界でより良く生きることばかりに信仰を用いようとし、関心が集中してしまっている私たち一人一人に、目には見えないけれども確かに存在する内なる人が、目には見えないけれども確かな神の国を追い求めることこそ、外なることや外なる人ばかりに集中しているこの世界の根本的な問題解決だということを、明確に教えて下さっています。

このイエス様の教えを私たちの身に具現化するためには、何よりも先ず第一

に、主イエスにあって新しく生まれなければなりません。

衰えていく外なる人のパラダイムから、日々新たにされる内なる人のパラダイムへとシフトさせて頂かなければなりません。

そして、主イエスにあって新しく生まれたからには、いつまでも乳飲み子のようなわけにはいきません。

私が小学生の頃、遠足で、上野動物園や東武動物公園や多摩テックという遊園地にワクワクしながら行ったことを今でも覚えております。

遠足の前日、決められた300円以内までのおやつを買うために近くの駄菓子屋に行って、ここぞとばかりに300円いっぱいまでのお菓子を買いました。

友達の中には、300円の限度額を優に超えるおやつを買っても、300円以内だと言い張ってその買ったお菓子全てを持ってくる強者もいました。

また我が家は、クリスチャンホームではありませんでしたので、「あ〜した天気になあれ」と、てるてる坊主を作ってベランダの柱に結び付けたりもしました。

小学生の頃は、学校や塾で行く遠足が何よりも楽しみでした。

でも成長して大人になるにつれて、それよりも楽しいこと、嬉しいことが沢山あることを知りました。

いつまでもリュックサック背負って、300円以内のおやつを持って、てるてる坊主頼みの楽しみに居座ってなんかいられません。

もっと奥深い、もっと心の奥底から「ああ、楽しい。ああ、嬉しい」というようなことがあることを大人になるにつれて知りました。

例えば、家族が出来たけれどもお金があまりなくて、2500円という限られた予算で、家族6人楽しく外食出来た時のあのほろ苦くもほっこりとした喜び。

父が亡くなった時、父の葬儀を家族みんなで準備し、平安のうちに父を天の御国へと送り出した時の喜び。

お腹の中でへその緒が捻じれてしまって栄養分が届かずに成長が止まってしまった我が子が、低体重児で生まれたにもかかわらず、生きようと口いっばいに広げてお母さんの乳首をくわえながら一生懸命におっぱいを飲み始めた時の涙ながらの喜び。

まさか自分がクリスチャンとなって牧師にまでなって福音を語り、その語られた福音を信じてイエス様を信じるように導かれる方が起こされた時の喜び。

何とも言えなく辛く苦しく悲しいのに、それでもイエス様ゆえに取り去られることのない希望と命があることに平安があり、笑顔になれる喜び。

どんな言葉もかけてあげることなんか出来ない悲しみや苦しみにある人が、イエス様にあってそれでも生きようと腹をくくった姿を見た時の喜び。

クリスチャンでなかった時の父が、「お前の仕事は、金じゃ決して買えない仕事だなあ」と、しみじみ言ってくれた時の喜び等々。

小学生の頃、高々動物園や遊園地に行く程度の遠足が全ての楽しみであり喜

びであるかのような時には、一切想像もつかなかった深く、広く、素晴らしい喜びが、大人となって成長していった先にあるように、信仰者として生まれたからには、外なる人ばかりを満たすことで喜んでいる程度の喜びを遥かに超える喜びがあることを知り、その喜びを知れるための霊的成長と霊的成熟を願う祈りが求められていることを認め、祈るのです。

Part Three

私たちは、いつまでも乳飲み子や幼子のように、外なる人を満たすことのためにばかり祈ってはいられません。

「お金をください」、「子どもを合格させてください」、「死ぬのは怖いし嫌なので、何としてでも直してください」、「どっちに行った方が得でしょうか？得な方へと導いて下さい」、「リビング、ダイニング、4つの部屋全面すべてが日当たりのいい土地と家を下さい」、「私の思いが正しく、あの人が間違っていることを示してください」、「私の置かれている環境を、状況を、条件をどうにかして変えて下さい」、自分のことを棚に上げて「この世界から争いが無くなるよう悪い人たちをどうにかしてください」等々、外なる人に関わることを満たして下さることをもって、あたかも「神が神であられることを認めます、認めてあげましょう」というような祈りばかりがいつまでも口を突いて出てきて、「私、立派なクリスチャンですから」、または、「立派ではございませんが、それなりにクリスチャンやってますから大丈夫です」というような幼稚なところばかりに落ち着いてなんかいません。

もちろん、こういう祈りがいけないということではありません。

ぜひぜひ、祈ってください。祈りましょう。

神様は、そういう祈りにも十分に答えてくださいます。

ただし、もし答えて下さったとしても、私たちの外なる人を着飾らせ、満たすために答えて下さるのではなく、神様がどういうお方なのかを分からせるために、神との関係を深めるために、より神に密接に繋がることのために答えて下さっていることを覚えなければならないでしょう。

決して外なる人を満たすためではありません。

なのにとすると、外なる人をどれだけ満たして下さったかで、神様を計り、信仰を計ろうとしてしまいます。

「私の祈りはこんなにも聴かれたの！」、「いやいや、私の祈りこそ、こんなにも聴かれたのよ！」と、結局、外なる人の競争や争いになってしまいます。

でも大丈夫です。

神様は、ある時から、そのような祈りに全然と言いましょるか、全くと言いましょるか、中々答えて下さらない時をお与えになります。

何のために？ 内なる人の成長のためにです。

「イエス様を信じて、まあ3年ぐらいはこういう祈りに応えて下さるでしょう」と、神学校の先生が仰っていました。

まだまだ生まれたばかりの乳飲み子で、そういうレベルの祈りしか出来ないことをイエス様はよくご存じでありますから、私たちの信仰のレベルに合わせて、そのような祈りを受け止め、そのような祈りに豊かに応えてくださいます。

しかし、ある時から、そのような祈りには中々答えて下さらない時が来ます。なぜならば、いつまでも霊的乳飲み子でいるわけにはいかないからです。

「信仰を持って10年も20年も経っているのに、まだそういう祈りに神様が直ぐに応えて下さるといふならば、それは、信仰生活うん十年でも、その内実は1歳、2歳、3歳児なのかもしれません」と、これまた神学校の先生が言っておられました。

信仰には、内なる人の成熟と成長が求められます。

神様は、環境や状況や条件を一切変えることなく、その中で生き抜く、その中で神と共に生き抜くということを通して、内なる人の成長を促して下さいます。

そして、信仰が成熟すれば成熟するほど、「今置かれた中にある意味を見出させてください」、「この中に隠された主の御旨を悟ることが出来るようにお導きください」、「その中にあなたが意図しておられる宝を見出すこと出来るように信仰的忍耐をお与えください」、「そして、あなたのご愛がどれほどに深いものなのか、キリストの愛がどれだけあり得ないほどのことなのか、あなたの御旨を知れるその時まで、あなたにより頼み、あなたを信頼することが出来ますように」と、祈るようになるでしょう。

使徒パウロは、「この牢屋から私を出してください」とは祈らず、「神から受けたものがどれほどにとんでもない祝福であるのかを悟らせてください。イエス様の愛の底知れない深さ、長さ、広さ、大きさを悟らせてください。心の目がはっきり見えるようにしてください。さらには、彼らもそうなるようにしてください」と祈りました。

「環境や人を変えて下さい」と祈るのではなく、「私を変えて下さい」と祈りました。

そしてパウロは、人として得られる最大の喜びである祈り、信仰的境地にまで導かれて行きます。

Part Four

ローマ人へ手の手紙14：8 (パウロ)

これが、内なる人が強められるということです。

これが、内なる人が成長し、成熟するということです。

これが、神の国と神の義を第一に求めた先にある究極の喜びです。

そしてこれが、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人を飾りとした人のみが口にすることの出来る言葉です。

そして、あのイエス様に倣う祈りでもあります。

イエス様は十字架に架かれる前夜、弟子たちに、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです」と仰り、父なる神様に身悶えされながら、血の汗を滴らせながら、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈られました。

ですが、その祈りに父なる神様はお応えになりません。

でも、祈りに応えて下さらない父なる神様の血の滲む宝のような御旨をご理解され、「わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください」と、さらに祈られました。

パウロ先生の祈りは、主イエス様の祈りであり、父なる神様のその深く、広く、大きい御旨を信頼することが出来るほどに内なる人が強められた結果、口を突いて出て来た祈りでした。

神様は何かの事柄のために、私たちを動員したり、利用したりするお方ではありません。

私たちのために、事柄を、物事を、事件を動員されるお方です。

何かの事柄や事件を解決し、上手くいったことをもって、信仰や神を計るのではなく、その事柄や事件を通して私の内なる人がどのように強められたのかが、神様の目的であり、信仰者としての真骨頂です。

神様の目的は、何か物事を成すことではなく、私たち一人一人その者が、神様の目的です。

これをはき違えてしまいますと、聖書の教える、イエス様が教えて下さっている信仰から逸脱してしまいます。

世の中の問題は、世の中が作り出した、または人が作り出した問題解決方法に従っては、解決されません。

今、世の中の状況が少し変わりつつありますが、この3年とちょっとの間、世界中がコロナ禍という事件の中に置かれました。

コロナについて、人それぞれ色々な考えや意見はありますが、すべての人が認めざるを得ない事実は、物事すべてを、外なる人の方法によって外なる人を満たそうとする生き方の蔓延が、そういう文明形態が、こういう事態を招いたということです。

それでもまだ、人間は、外なる人ばかりに集中し、執着し、根本的な解決にならないにもかかわらず、あたかも解決があるかのように意地を通そうとしております。

こんな時、クリスチャンは内なる人の価値を發揮しなければならないですね。でももし、同じレベルでしか物事を見られないならば、パウロの祈りが、心底求められます。

「どうか御父が、その栄光の豊かさに従って、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めてくださいますように。」

私たちキリスト者は、問題の解決を、目に見えるものからではなく、目に見えないものから問題を解決することを知っているはずの者たちです。

だから祈るんです。

「どうか内なる人にお働きになる聖霊なる神様が、私の、私たちの内なる人を強めてくださいますよう」と祈るんです。

Conclusion

教会は、内なる人で始まり、内なる人で終わることを知っている者たちの群れでもあります。

内なる人が主イエスによって生まれ、内なる人が強められ、内なる人が健やかに育つならば、まことかまことじゃないものを見極め、この地においてその時その時に適った平和を味わい、行った先々で、僅かも知れない小さく小さいものかもしれないけれども、その周りには天の御国が成ることでしょう。

使徒パウロは、口達者な人ではなく、むしろ、口下手な人でした。

所謂、見た目がいい人ではもなく、むしろ、当時の人たちの目から見て、見た目もあまり良くなかったと伝えられています。

イスラエルのサウロ王のように人を何だか引き付ける魅力のようなものよりも、普通にいたら特段目立つこともないような人でした。

なのに、パウロ先生の行くところいくところに、教会ができました。

平和があり、命があり、信仰があり、神の国がある、キリストの香りを感じる教会ができました。

外なる人に何か頼れる、誇れるようなものがあつたからではありません。

内なる人の価値を知り、内なる人がキリストによって、御霊なる神様によって強められることの真実さを知り、内なる人が強められることを追求することをもって、神の国と神の義を第一にし、内なる人によって物事を判断し、内なる人によってその価値を見分けることを諦めなかつたからです。

どの時代、どんなところにあつても、またどんな教会においても、問題があるならば、その根本的原因は、内なる人が御霊なる神様によって強められることの重要性を見失っているところにあるでしょう。

私たちは、外なる世界に、内なる人で勝つ存在とされました。

そして、内なる人によって勝つことに、まことの勝利を見出すことの出来る者とされました。

だから祈りましょう。

なので祈りましょう。

「どうか御父なる神が、その栄光の豊かさに従って、内なる人に働く御霊によって、力をもって私たちの内なる人を強めてくださいますように」と祈りましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 3：16